

『気まぐれシェフの恋のレシピ』

著：森本あき

ill：タカツキノボル

「いいか、緊張するなよ」

午後三時。遠藤と待ち合わせて、店に向かいながら、そんなことを言う遠藤の額(ひたい)を、知己は指で弾(はじ)いた。中学に入ったときは同じぐらいの背丈だったのに、成長期は遠藤にだけきたようで、知己が百七十にちょっと足りない(が、自分では百七十だと言い張っている)のに対して、遠藤は百八十後半。額を指で弾くのも一苦労だ。

「おまえがめっちゃめっちゃ緊張してんじゃねえか」

知己は笑った。遠藤は、痛い！ と言いながら、知己を見下ろす。

「だってさあ、俺、面接すんの店長だけだと思ってたら、シェフの…あ、あれ！」

遠藤は店を指さした。確かに、この地域には不似合いな、いかにも高級そうなフランス料理店が建っている。外出するにしても、用があるところ以外には行かないので、知己はこの店の存在自体をまったく知らなかったのだ。

「これ、いつごろできたの？」

「まだ半年もたっていないと思う。俺、オープニングスタッフだったから…」

遠藤が指を折って数え始めた。

「うん、四ヶ月ぐらいかな」

「四ヶ月でそんなに人気が出んの!? すげーなー」

知己は目を丸くした。ロコミだけで、おいしいというわさが広がったのだろうか。

「ああ、だって、シェフの人、すごい有名らしいから。有名人や芸能人とかもたまに来てる。時間、間に合ってるよな」

遠藤がそわそわしている様子を見て、知己は首をかしげた。知己も結構物(もの)怖(お)じしない方だと思うけど、遠藤は『鋼鉄の心臓』とあだ名をつけられたことがあるぐらい、芯(しん)が強い。その遠藤をこんなにさせるのは、同席するというシェフだろうか。

「そういえば、この店、なんて名前？」

フランス語であろう店名が、表の看板に書いてあるけれど、第二外国語がフランス語じゃない知己には読めない。

「サンタムール。意味は…」

遠藤が説明しようとしたとたん、カランカランとドアベルの音がして、ドアが開いた。知己はすぐにうつむく。

初対面の人(ひと)は苦手。きっと自分の顔を見たら、同じことを言うだろうから。

昔から言われ慣れてきた。

大好きだった人には、数え切れないほど言ってもらった。

だけど、その人がいなくなってから。

知己の前(まえ)から姿(すがた)を消(き)してから。

決して聞(き)きたくない言葉(ことば)。

だれにも言(い)わせない言葉(ことば)。

大きなくりくりとした目。全体的に小さい顔。そして、少しぼつちやりとした唇。
男にも女にも、そういう顔の人にはたった一つのほめ言葉しかないかのように、みんなが言う言葉。

かわいい、なんて聞きたくない。

おせじだろうと、本気だろうと、言われたくない。

言ってほしい人は、いまここにはいない。

…一生、知己の前には現れない。

「あ、おはようございます！ こっちが…」

「よく知ってるよ」

最初は分からなかった。

遠藤がしゃべっているんだから、自分には関係ない、と内容を聞かないようにしていたから。

少し遅れて、脳にその人の声が届き。そして。

「え、風(かざ)真(ま)シェフ、知己のことご存じなんですか？」

遠藤が驚いたようにそう聞いている。

風真シェフ…？ 風真？ フランス料理？ フランスで一年修行？

がぼつと顔を上げると、三年前とまったく変わっていない笑顔が目の中に飛び込んできた。

あまりのことに、頭がパニックになる。

どうして!?

どうして、この人がここにいるの!?

「ご存じ？」

彼はくすくすと笑った。

優しいしゃべり方をする人だった。上品に笑う人だった。

それは、いまも変わっていない。

「そんなどころじゃないよね、知己」

どうして、そんなに普通にしゃべれるのか。

どうして、笑えるのか。

どうして、ここにいるのか。

いろいろな疑問が、頭の中を駆けめぐる。

「久しぶり、元気だった？」

質問にも答えられない。ただ相手を凝視するだけ。

「おい、知己、どういうことだ？」

遠藤が小さな声で聞いてくる。そんなこと、こっちが聞きたい。

遠藤に、きちんとその有名なシェフの名前を聞いておけばよかった。

そもそも、バイトの代わりなんか引き受けなきゃよかった。

母親に、遠藤の父親の癌の話なんか聞かなきゃよかった。

いろんな後悔が、一気に押し寄せてくる。

「あいかわらずかわいいね」

そう言うと、彼はにっこりと笑った。遠藤が隣で固(かた)まる。知己が、かわいい、と言われたときの対応を、身に染(し)みて分かっているからだろう。

だけど、動けない。

いつものように、手や足を出せない。
だって、だって、だって。
知己の目の前にいる人は違うから。
三年前に、置き手紙一つ残さず、何の伝言もなしにフランスに行ってしまった人。
好きで好きで大好きで、これが生涯、最初で最後の恋とまで、高校生だった知己に
思わせた相手。
それからずっと忘れられなくて、街を歩くたびに姿を探してしまう自分がいやで、家を出られなくしてしまった張本人。
風真涼(りょう)介(すけ)が、優美な微(び)笑(しょう)を浮かべながら立っていた。

本文 p30～36 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>